

審査結果の要旨

氏名 村井潤一郎

本論文は、Grice (1975) の「会話の協調原理」や、McCornack (1992) の「情報操作理論」などの先行研究を踏まえ、人が話し手の発言を欺瞞的であると認知する時の影響要因を明らかにしようとしたものである。本論文は、3部9章から成っている。

第1章では、心理学における嘘に関する基礎研究について言及した上で、本論文が依拠する会話の協調原理、情報操作理論を整理し、先行研究の問題点について述べている。第2章では、人は言語情報から真実の発言を真実と判断したり、嘘の発言を欺瞞的だと判断したりすることがどの程度可能かを調べるために、欺瞞検知実験を行った。その結果、チャンスレベルでしか真偽を検出できないことが判明した。第3章では、日記法による調査を行った結果、青年期の日常生活において、かなりの頻度で嘘をつくことがある一方、他者の発言を嘘だと思ふ頻度ははるかに少ないことがわかり、本論文の日常的、現実的な意義の裏づけとなるとしている。第4章では、質問紙調査によって、聞き手は欺瞞的な発言をいかなる次元で捉えているのか、その認知構造について検討し、どのように言うか (how) に関する因子 (量・様式) と、何を言うか (what) に関する因子 (質・関係) の2因子が得られたとしている。

以上の基礎的検討を踏まえ、以下では、情報操作理論をもとに、発言内容の欺瞞性認知について質問紙実験による検討を行っている。第5章では、曖昧度の高い発言内容は欺瞞度が高く認知されること、生起頻度 (日常での起こりやすさ) が高ければ欺瞞性が低く、立証可能度 (話し手の言ったことを立証できる程度) が高ければ欺瞞性が低いことがわかった。Grice (1975) の会話の公準の複数違反の効果は見出されなかったが、様式に違反せずに一文で言い切る場合には欺瞞性が低くなることが示された。第6章では、話し手と聞き手の人間関係に着目し、好意性を表明した発言内容は、非好意型・中立型と比較して、欺瞞性が低くなることを見出している。第7章では、必要以上に発言内容を強調した場合には欺瞞性が高くなるという仮説を実験的に検討したが、予測に反し、強調語の効果は見出せなかった。なお、ここまでの実験では話し手を恋人と想定していたが、第8章では、話し手として恋人、親友、知人の3種類を設定し、加えて、聞き手の性差、様式と量の組み合わせ、性格特性 (ここでは一般的信頼) の効果についても考察した。その結果、検討したすべての発言内容において、親友条件の欺瞞度が低くなること、聞き手の性別は顕著な影響がないこと、一般的信頼と欺瞞性認知との関連はほとんど認められないこと、等の知見が得られたとしている。第9章では「全体的考察」として、以上の研究を総括している。

このように、本論文は、先行研究の各種問題点を克服した上で、情報操作理論を精緻化し、さらに、発言内容を中心にしながらも、それ以外の要因についても検討した点で、日常的に生起する欺瞞性認知の生じるメカニズムに関して新たな知見をもたらす優れた研究として評価された。よって、本論文は、博士 (教育学) の学位を授与するにふさわしいものと判断された。